
X・B・S 美琴と黒子の場合

セイバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

X・B・S 美琴と黒子の場合

【Nコード】

N3610P

【作者名】

セイバー

【あらすじ】

聖なる夜の愛の物語。それはパーティーの買出しから始まった。クリスマス小説第五弾です。

黒子

「お姉さまーーーー」

いつものように変態行為と思われるほどの過激なセクハラを行う黒子。もちろん結果は

美琴

「うらあーーーーー!!」

黒子

「ぎゃふっ!」

飛びまわし蹴りによって吹っ飛ばされた。(笑)

美琴

「あんたねー、もう少しマシな方法はなかったの?」

黒子

「お姉さま……。明日の予定分かっていますわよね……。とまあそんな感じで今日は12月23日。クリスマスイヴを翌日に控えた日。黒子はいつにも増して激しい。(いろんな意味で)

美琴

「わーってるわよ。初春さんや、佐天さんとパーティの買出しでしょ」

黒子

「ええ、そのとおりですわ」

さっきの蹴りを受けたにもかかわらず何事もなかったかのように立ち上がる。ホントタフだな(笑)。

そして翌日、美琴と黒子と佐天と初春の四人は大型ショッピングモールについた。ここでパーティの買出しをするのだ。

佐天

「うわー、ホントカップルだらけじゃん」

初春

「やっぱりクリスマスシーズンですからね」

美琴

「それじゃ、役割を確認するね」

美琴と黒子がジュース類とケーキを、佐天と初春がパーティ料理を買いにいくのだ。

佐天

「それじゃ、後で」

美琴

「またね」

美琴と黒子はケーキやジュースを買い終わると店を出て行った。

黒子

「お姉さま、どちらへ？」

美琴

「ちよつと、欲しい物があるんだ」

そついうと美琴は黒子と一緒に小売店に入っていった。

小売店の中で、美琴は欲しい物を探している。

美琴

「あ、あつた」

黒子

「お姉さま、欲しい物つてなんですか？」

美琴の探しているもの、それは長いマフラーであつた。

美琴

「これよ、これ。どうしても今日中に欲しかったんだ。良かったー
ー。まだ残つてて」

マフラーをレジまで持っていくと、美琴は会計を済ませる。

黒子

「しかし、なぜ長いんですの？お姉さまのサイズには合いませんわ

よ」

美琴はそれを聞くと、

美琴

「へへっ、これはね・・・こう使った」

美琴は黒子の首に、マフラーを巻き、自分の首にも巻いた。

黒子

「お、お姉さま・・・／＼／＼」

美琴

「あたしね・・・、自分の気持ちがようやく分かったんだ・・・。
あたしはあんたが好き。あたしと付きあって」

黒子

「お姉さま・・・」

突然の美琴の告白に少々驚く黒子。だが元々彼女の答えは一つしかない。その想いを伝えようとしたそのとき、

ドカーーーーン

突如ショッピングモールに爆発が起こった。どこぞの馬鹿が起こしたのであろう。その煙からは、巨大なロボスーツを着た女性がいた。テレスティーナである。

テレスティーナ

「見つけたあああああ！！」

つてあれ？あんた美琴達によってアンチスキルに捕まったはずじゃ！？」

テレスティーナ

「あのガキ達に復讐するために脱獄したに決まってるだろ！！」

そう言い、視線を美琴達に向けるテレスティーナ。しかし、二人の姿はいない。

テレスティーナ

「なっ、どこに！？「あんたねえ・・・」はっ！！」

後ろを振り向くテレスティーナ。その後ろには美琴と黒子がいた。黒子のテレポートによって脱出したのだ。

テレスティーナ

「ここであつたが百年目！あの時の借り、利子をつけて、「そんなことはどーでもいい！！」ええっ!？」

さすがのテレスティーナもこればかりは驚いた。決めゼリフを遮られたばかりではなく。どうでもいい扱いされたのだ。

美琴

「せっかく黒子の返事を待ってたのに……」

黒子

「せっかく黒子の想いを伝えようと思つてのに……」

くろみこ

「「邪魔すんなやババアーーーーー」」

テレスティーナ

「ええーーーーーっ!？」

またしても驚くテレスティーナ。

美琴

「覚悟は……」

黒子

「できてますわよね……」

美琴の体には電流が走っている。さらにその手にはコインが用意されている。超電磁砲レールガンの発射準備をしている。

テレスティーナ

「えっ、いや、ちよっ、ま、待て、話せば分かる!!」

くろみさ

「「問答無用ーーーーー!!」」

テレスティーナ

「やっぱーーーーー」

怒りの超電磁砲がテレスティーナに命中した。それをもろに喰らったテレスティーナはパワードスーツから放り出された。

初春

「何の騒ぎですか？」

騒ぎにつられて初春と佐天も店にやってくる。

佐天

「初春、あれテレスティーナじゃん！」

初春

「本当だ。どうして・・・」

美琴

「あたし達に復讐するために脱獄したんだって」

黒子

「ホント馬鹿ですわね」

二人が美琴達に視線を戻すと、二人そろってマフラーを結んでる状態であった。

初春

「どうしたんですか？その姿」

佐天

「あんた達、そんな中だっけ？」

美琴

「まあね」

黒子

「今からです」

美琴

「でさあ、黒子・・・」

黒子

「？」

美琴

「さっきの返事だけ・・・／／／」

黒子

「それでしたら」

黒子は返事としてみ琴の唇にキスをした。当然三人とも真っ赤になった。

美琴

「く、黒子／＼／」

黒子

「大好きですよ。お姉さま／＼」

美琴

「黒子……。あーもう可愛いなあー／＼／」

黒子

「お、お姉さま／＼／」

美琴はあまりにも可愛かったので頬ずりした。

佐天

「はいはい、ごちそうさま」

初春

「それじゃ、帰りましょうか」

美琴

「うん」

黒子

「そうですわね」

そして、四人は帰っていった。その中でも美琴と黒子はお互いの手を握ったままであった。

一方そのころ……すっかり忘れられたテレスティーナは
テレスティーナ

「今回何のために脱獄したんだ……（涙）」

そのあと再逮捕されたとき。（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3610p/>

X・B・S 美琴と黒子の場合

2010年12月29日23時28分発行